



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道における新酪農村民の生活と健康に関する研究
Author(s)	藤本, 俊; 佐々木, 胤則; 田中, 豪一 他
Citation	環境科学 : 北海道大学大学院環境科学研究科紀要, 4(2), 161-172
Issue Date	1982-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37121
Type	departmental bulletin paper
File Information	4(2)_161-172.pdf



北海道における新酪農村住民の 生活と健康に関する研究

藤本 俊・佐々木胤則・田中豪一

新岡 正・加地 浩・斉藤和雄

北海道大学大学院環境科学研究科環境医学講座

Studies on Life Status and Health of Inhabitants in the Newly Developed Dairy Farming Village in Hokkaido

Shun Fujimoto, Tanenori Sasaki, Goichi Tanaka,

Tadashi Nioka, Hiroshi Kaji and Kozuo Saito

Department of Environmental Medicine, Graduate School of Environmental
Science, Hokkaido University, Sapporo, Japan, 060

I. 緒 言

本研究は、冷涼な気候を有する北海道の、地域農業として重要な、酪農に従事する人々の生活と健康が、自然環境及び、社会環境の変化といかなる関係を持つかを把握する為に行われた。調査対象地区は、北海道第3期総合開発計画¹⁾の代表的目標として位置づけられ、酪農村建設が行われた根室地域である。この地域には、1市4町があり、面積は約3,486 km²である。著者らは、この新酪農村地域のうち、昭和50年度から昭和54年度にかけて入植した、野付郡別海町香川、昭和、奥行に居住する、酪農村住民を対象とし、生活と健康に関するアンケート調査を実施し、得られた資料をもとに解析した。この資料は、いわゆる開発当初の前値として捉えることも可能であり、また酪農従事者の生活と健康のひとつのパターンの代表とも考えられ、将来における比較対照の重要な資料を提供するものと思われる。

II. 調 査 方 法

対象は、根釧地域に位置する野付郡別海町で、人口約1万8千人、乳牛数約8万6千頭を有す、文字通り酪農の町である²⁾。また、本町の一部である根室湾岸の浜別海は、沿岸漁業を主とし、年間約8,650トンの漁獲量がある²⁾。気候は冷涼で、気温の年較差が大きく、夏季では30°C、冬季では、逆に-30°Cとなることもある。年平均気温は、5~6°Cと低く、したがって米の栽培は不可能であり、一部の牧草のみの生育が可能である。

この様な気象条件にも拘わらず、広大な土地資源を有し、地勢がおおむね平坦であるため、パイロットファームの建設が行われ、今日の様な酪農地帯へと発展することとなった。

1981年7月18日受理

Received, 18 Jul. 1981

別海町を中心として、南は根室市、北は中標津町にまたがる地域の、いわゆる新酪農村建設¹⁾は、昭和48年度に始まり、昭和55年度末に完了を予定している。著者らの調査対象農家は、この地域の中で、昭和50年度より入植した、別海町昭和、香川、及び奥行の全31戸である。それぞれの対象農家は、酪農又は肉牛飼育を行ない、最新式畜舎を持ち、耕地面積は1戸当たり、50~60 ha という広さである。事前に対象地区の全人口及び年齢構成を調査し得なかったため、各戸にアンケート用紙を4組ずつ配布し、20歳以上の成人をできるだけ把握する様にした。アンケート用紙は2部よりなり、1部は C. M. I. (Cornel Medical Index)³⁾ であり、他の1部は、当教室で作製した、「農家の生活および健康に関する調査」用紙(以下「農健」と略記)で、6頁15項目の質問からなっている。すなわち、居住年数、生活意識、自家用車の保有台数、農業機械の種類、生活時間、自覚症状、持病の有無、喫煙歴、飲酒歴などに関する項目である。アンケート用紙は、予め戸別に、昭和55年1月15日郵送し、同月18及び19日の2日間にわたって、戸別訪問し回収を行った。回収時、エヒノコックス症の汚染地域である根釧地域において、当地区の皮内反応検査の実施状況と、一次病院と二次以降の病院がどこであるかを、口頭で質問した。

III. 調査成績

アンケート用紙全配布数124組のうち、C. M. I. 66部、「農健」70部を回収した。回答者の男女別年齢構成は、Table 1のごとくである。対象は20歳以上の成人としたが、19歳の者が1名回答していたので、これも加えて検討することにした。

1. CMI の成績

この調査用紙は、A-R の18項目により構成され、A-L は、身体症状について、M-R は精神症状について、男子211、女子213項目のはい、いいえで答える質問からなっている。A-L、M-R をそれぞれひとまとめにして、男女別年齢別訴え数の平均値±S.E. を算出し示したのが、Table 2、3である。Table 2は、身体症状の訴え数を示したものであるが、同一世代の男女間では、有意差が認められなかった。しかし、女性では30歳以下の世代が40及び50歳代に比較して、訴え数が有意に少なかった。19~30歳及び31~40歳の男性は、同年代の女性に比較して、訴え数は多い傾向にあるが、有意差はなかった。

Table 1. Age Distribution of Subjects

Age	Male	Female	Total
19~30	11	8	19
31~40	6	7	13
41~50	11	6	17
51~60	7	6	13
61~70	4	3	7
71~	1	1	2
Total	40	31	71

Table 2. Physical Complaints: A-L in C. M. I.

Age	19-30	31-40	41-50	mean±S.E. 51-60 (years old)
M	11.8±2.63	21.2±6.82	19.6±4.24	20.7±4.94
F	4.4±1.17	19.7±8.40	*29.3±6.94	*31.3±6.78

* significantly different from female aged 19-30, $p < 0.01$

Table 3は、精神症状について示したものである。すなわち、男女間の比較では、19~30歳の群において、女性が男性に比較して、有意に訴え数が少なく、他の年代においては、61歳以上の群を除いて、男性が、女性より精神的訴えが多い傾向を示した。各年代間の比較では、女性は年代が進むにつれて、訴えが増加する傾向を示し、51~60歳と19~30歳の群の比較では、訴え数に有意な差が認められた。しかし、年齢と訴え数との相関関係をみると、有意性は認められなかった。

Table 3. Psychogenic Complaints: M-R in C. M. I.

mean±S.E.

Age	19-30	31-40	41-50	51-60 (years old)
M	*4.3±1.36	4.5±2.08	7.8±2.25	6.0±1.67
F	0.5±0.30	4.1±2.20	2.9±0.80	*5.9±2.19

* significantly different from female aged 19-30, $p<0.05$

Brodman ら⁴⁾の方法に従うと、30問以上の質問に「はい」と答えたものは、男性12名(35.3%)、女性9名(31.0%)と高率であり、情緒異常者がかなりいることになる。Table 4は深町⁵⁾の基準に基づいて、分類したものである。III, IVは、それぞれ、神経症傾向を持つものと、神経症と断定できるものであるが、この領域に入るのが、男性8名(23.5%)、女性7名(24.1%)認められた。

Table 4. Classification of the Inhabitants in Dairy Farming Village by C. M. I. Categories

C. M. I.	Number of Subjects (%)		
	Male	Female	Total
I	17 (50.0)	16 (55.2)	33 (52.4)
II	9 (26.5)	6 (20.7)	15 (23.8)
III	6 (17.6)	6 (20.7)	12 (19.0)
IV	2 (5.9)	1 (3.4)	3 (4.8)
III+IV	8 (23.5)	7 (24.1)	15 (23.8)
Total	34	29	63

2. 「農家の生活及び健康に関する調査」成績

1) 農業従事年数

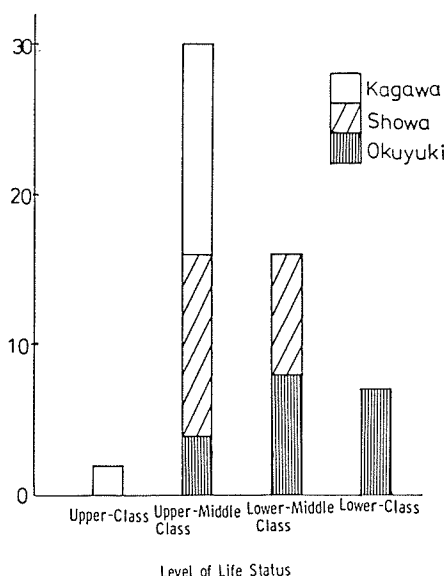
農業従事年数については、当酪農村入植の条件として、酪農経験者が、優先であるため、20年～40年の者が、男性50%、女性59%と、大半を占めていた。

2) 生活意識

対象者の生活レベルが、上、中の上、中の下、下のどの範囲に入るかとの質問では、香川、昭和、奥行の3地区を比較すると、明らかに差が認められた(Fig. 1)。すなわち、香川地区では、上または中の上と考えている者のみであるのに対して、昭和地区の酪農民では、中の上または中の下、奥行地区の酪農民では、中の上、中の下、あるいは下に属すると考えており、各酪農民の意識から判断すると香川、昭和、奥行の順に生活レベルが、低くなっていると考えられる。

3) 農作業時間

Fig. 2は、農繁期の男女別農作業時間を示したものである。農作業時間は、男性では10時間が最も多く、女性

**Fig. 1.** Self-Estimation on the Level of One's Own Life.

では6~8時間が最も多い。平均では男性10.5時間、女性6.5時間であり、男女間に1%以下の危険率で、有意の差が認められた。Fig. 3は、農閑期の作業時間であるが、男性では、5、6、8時間と答えた者がそれぞれ3名ずつで最も多く、女性では、6、8時間と答えた者がそれぞれ5名ずつで、最も多い。平均では、男性7.2時間、女性5.3時間で、男女間に、5%以下の危険率で有意の差が認められ、農閑期の差は、男性で大きく、女性では殆んどない。

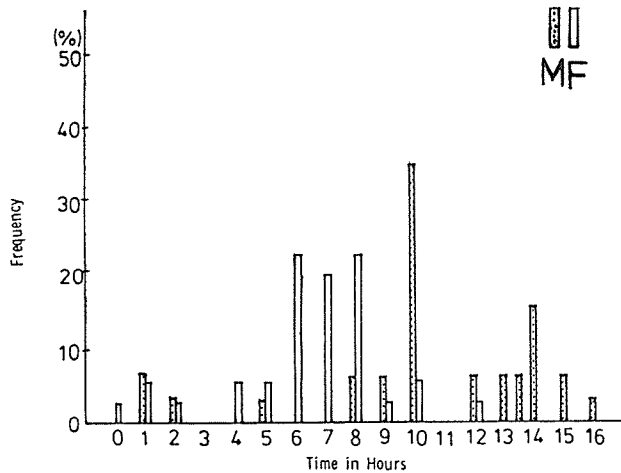


Fig. 2. Daily Working Hours during the Farmers' Busy Season.

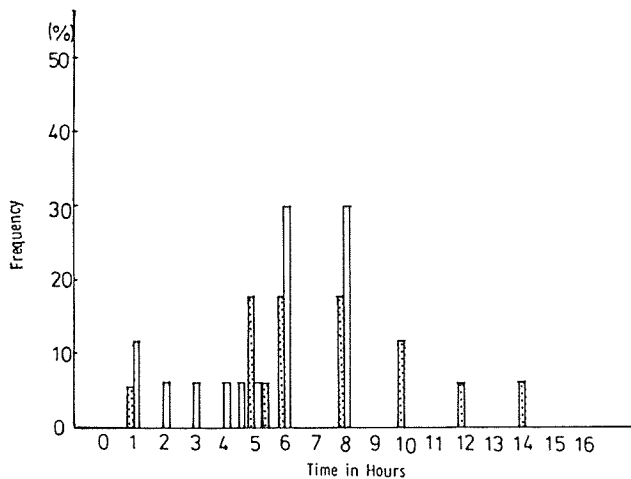


Fig. 3. Daily Working Hours during the Farmers' Slack Season.

Fig. 4は、農繁期の農作業時間を、男女別及び年齢別に示したものである。40歳以上の男性では、年齢と農作業時間との間に、有意な負の相関 ($r_M = -0.7547$) が認められた。女性も同様に、全年齢を通じて年齢と作業時間との間に、有意な負の相関 ($r_F = -0.6962$) が認められた。Fig. 5は、農閑期の農作業時間を男女別および、年齢別に示したものである。農繁期同様、男女それぞれ、 $r_M = -0.4996$, $r_F = -0.5692$ で、有意な負の相関が認められた。

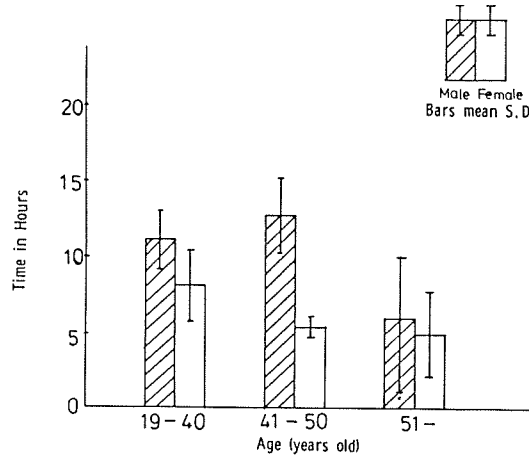


Fig. 4. Distribution of Daily Working Hours of the Farmers by Age during Busy Season.

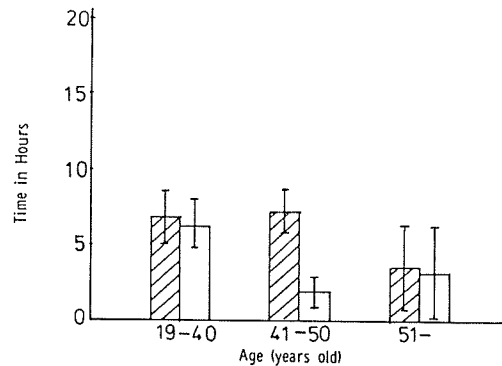


Fig. 5. Distribution of Daily Working Hours of the Farmers by Age during Slack Season.

3) 起床及び就寝時刻

Fig. 6 は、起床時刻を示したものである。農繁期と農閑期で比較すると、男女とも農繁期が、農閑期より有意に早く起床している ($P < 0.001$)。また、いずれの時期も、男女間では起床時刻に有意の差は認められなかった。Fig. 7 は、就寝時刻を示したものであるが、両期を比較して、男女とも農閑期の方が、やや早く就寝する傾向にはあるが、統計学的に有意差はない。男女間では、女性がやや早く就寝する傾向にあるが、これも統計学的に有意差はない。

4) 余暇の過ごし方

Fig. 8 は、余暇の過ごし方に対する答えをまとめたもので、1位に挙げたものを3点、2位を2点、3位を1点とし、合計した点数の高いものから順に並べた。すなわち、「テレビを見る」が117点で圧倒的に多く、ついで「新聞を見る」が53点、「読書」が46点となり、以下「昼寝」「孫子の世話」の順に続いている。

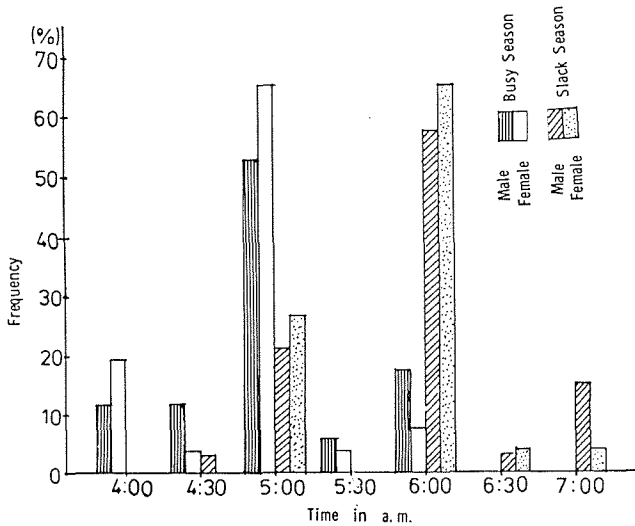


Fig. 6. Rising Time.

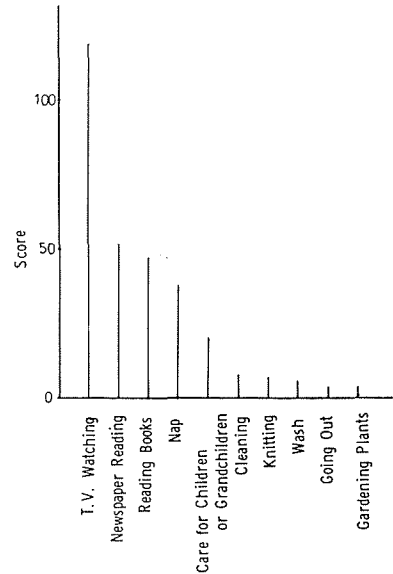


Fig. 8. How to Spend the Leisure Time.

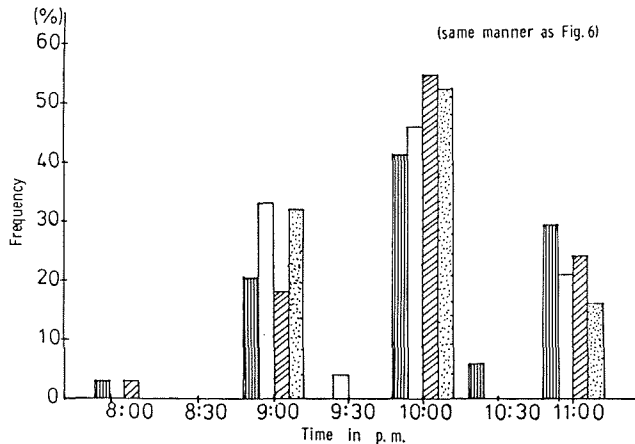


Fig. 7. Bedtime.

5) 最近の自覚症状

最近の自覚症状について、「いつもある」を2点、「ときどきある」を1点、「ない」を0点とし、一人当たりの得点を求め、年代別男女別に示すと、Fig. 9~15のごとくである。肩こりについて男女を比べると、女性に肩こりが多く、特に50歳代の女性に訴えが強い (Fig. 9)。

Fig. 10 は、腰痛の得点である。男女を比較すると、女性にやや訴えが強いが、年代による差はないと考えられる。

手足のしびれは、やや女性に訴えが強く、また加齢によって訴えの度合が、男女共に強くなっている (Fig. 11)。

Fig. 12 は、「夜中1回以上小便に起きるかどうか」という設問の項をまとめたものだが、これは前3者と比較すると、男性に訴えが強い点で異り、さらに加齢に従い、訴えが強くなる傾向を示している。

「息切れ」を訴えた人は、極めて少く、総計で1人当たりの得点が、男性では0.09点、女性で0.05点で、他の訴えと比べて著しく低得点であった。

Fig. 13 は、「不眠」の有無についてまとめたものである。これによると、男女の比較では、やや男性に訴えが強く、特に30歳代の男性に訴えが多かった。

Fig. 14 は、「めまい (立ちくらみ)」についてであるが、この項では、やや女性に訴えが強い。

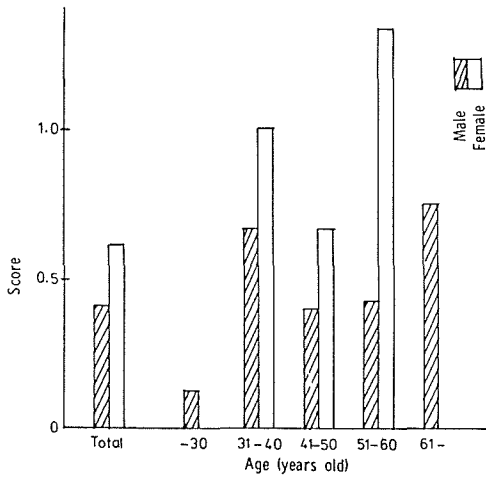


Fig. 9. Stiffness in the Shoulders.

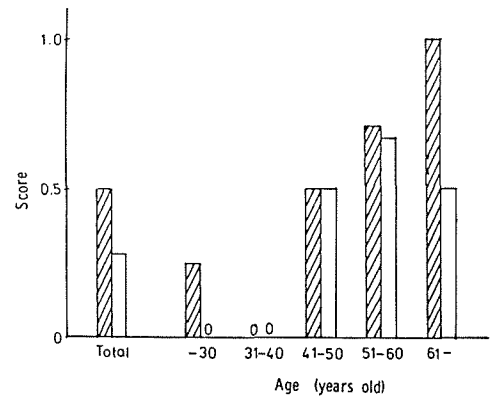


Fig. 12. Nocturia.

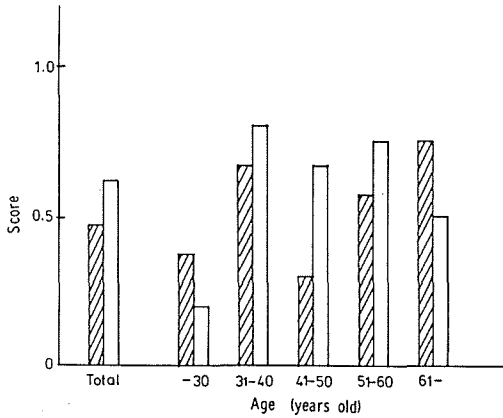


Fig. 10. Lumbago.

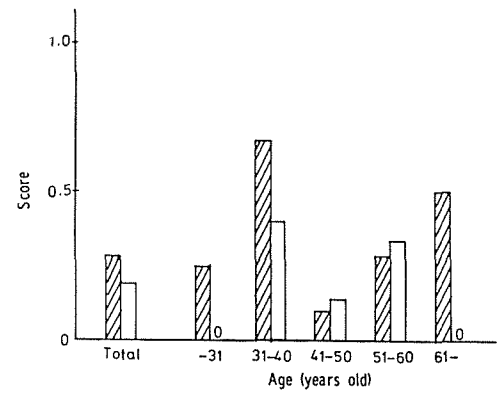


Fig. 13. Sleep Disturbance.

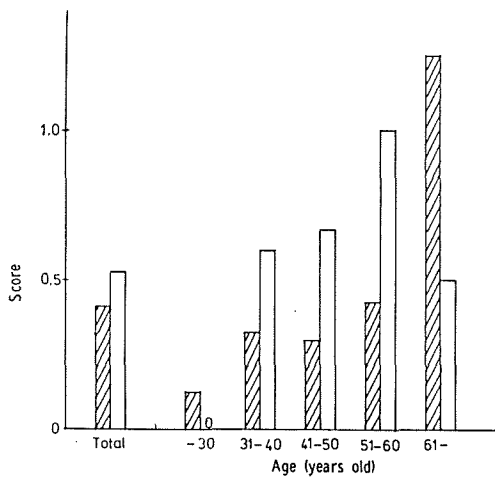


Fig. 11. Numbness of Hands or Feet.

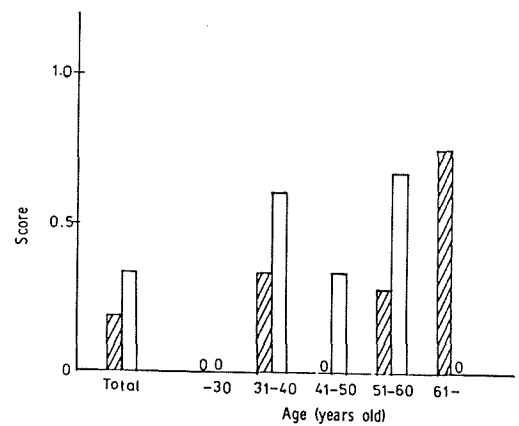


Fig. 14. Dizziness or Vertigo (orthostatic hypotension).

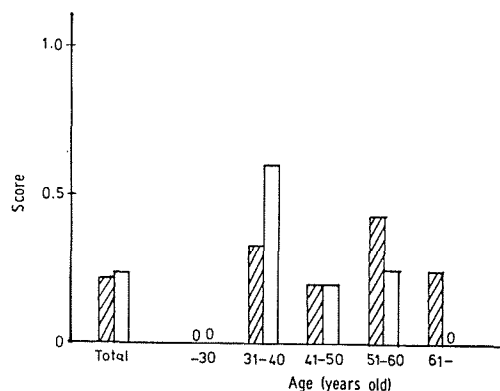


Fig. 15. Abdominal Distension.

Table 5. Smoking

Number of Cigarettes per Day	Number of Subjects		
	Male	Female	Total
0	10	19	29
1~ 5	0	2	2
6~10	4	0	4
11~15	2	1	3
15~20	12	1	13
21~30	4	0	4
31~40	4	0	4
above 40	0	0	0
Rate of Smoking (%)	72.2	17.4	50.8

Table 6. Drinking

Drinking	Male	Female	Total
Yes	26	4	30
No	7	11	18
Rate of Drinking (%)	78	27	62.5

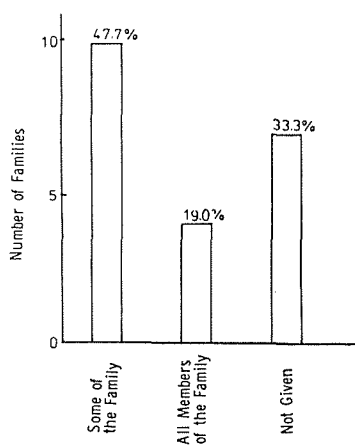


Fig. 16. Prophylaxis of Echinococcosis (dermal skin test).

Fig. 15 は「腹部膨満感」についてである。全体的に得点が低い、31~40歳の女性に訴えがやや強い傾向がある。

6) 喫 煙

男女別喫煙人数と、1日の喫煙本数を示したのが、Table 5である。喫煙率は、男性72.2%、女性17.4%であった。

7) 飲 酒

Table 6は、男女別飲酒の有無とその割合を表示したものである。毎日飲酒すると答えたものは、男性7名、女性1名であり、なおかつ日本酒にして3合以上毎日飲むとした男性1名は、アルコール性肝硬変の危険領域に入ると考えられる。

3. エヒノコックス症及び2次病院

1) エヒノコックス症の皮内テスト受診情況。31世帯中21世帯より、最近皮内テストを受診したかどうかの解答を得た (Fig. 16)。

2) プライマリーヘルスケア (P. H. C.) と2次病院

Fig. 17は、P. H. C. と2次以降の病院を、世帯別に質問した結果である。P. H. C. は町立病院をあげる世帯が、74%と多数を占めた。また、2次以降の病院は、釧路市内の病院をあげる世帯が、68.2%を占めていた。

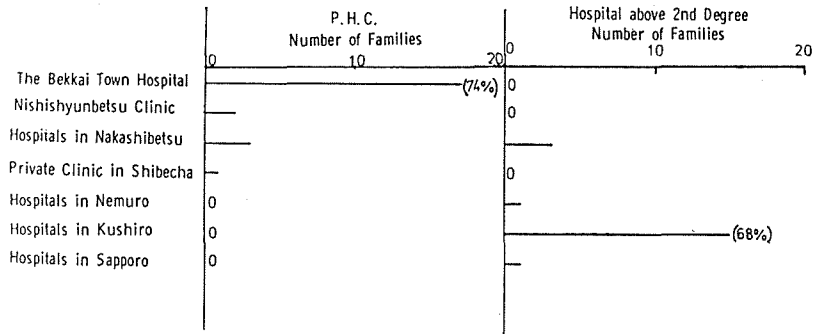


Fig. 17. Primary Health Care (P.H.C.) and Hospitals above 2nd Degree.

IV. 考 察

1. C.M.I.

C.M.I. は日本では深町の方法⁵⁾に従って、神経症のスクリーニングに用いられる。すなわち M から R までの「はい」の数と、C, I, J の「はい」の数とをとり、判別分析を行い四つの領域に分類する方法である。今回の調査対象住民を、この四領域に分類すると、男性 2 名、女性 1 名が、神経症と診断されるカテゴリー IV に該当した。男女合わせた 63 名中、3 名が IV 領域に入ったが、これは全体の 4.8% に当たる。III・IV 領域を合わせると、男性 23.5%、女性 23.8% が、この領域に入る。深町⁵⁾によれば、内科外来における心理的正常者 100 名の調査では、IV が 3%、III+IV が、25% であったという。また、青山⁶⁾は高校生 839 名、大学生 591 名、会社員 414 名を対象として調査を行ない、高校生では IV が 7.7%、III+IV で 29.7%、大学生で IV が 7%、III+IV で 27%、会社員（デパート及び水産関係）では、IV が 1.5%、III+IV で 12.5% を示している。また、安藤⁷⁾は、デパート従業員 1,599 名を対象とし、IV が 3.8%、III+IV が 27.9% であったとしている。この様に調査者及び調査対象により、差が示されているが、これは、調査対象者の心理的背景が重要な意味を有していることを示している（小比木⁸⁾）。すなわち、自らの健康状態や心理状態を悪く見せようとする場合には、III, IV 領域に入る割合が、高くなり、反対に良くみせようとする場合には、低くなる。このようなことを考慮すれば、新酪農村の場合は集団全体を見た時、心理状態にさほど偏りはないと考えられる。しかし、調査対象者の疾病状況を把握できていないので、新酪農村住民が、はたして健康集団であるか否かの判定は不可能であり、かりに健康集団であるなら、新酪農村住民はやや心理的に神経症傾向を示していると言えるが、さらに詳細な調査が、今後必要と考えられる。

また、IV 領域に入った 3 名が、神経症者といえるかどうかの問題については、九州大学の調査⁹⁾で示されている様に、その中には正常者も異常者もあり、C.M.I. だけで断定することは困難であり、実際にカウンセリングなどを行なえば、診断は確定できない。しかし、新酪農村住民の C.M.I. 調査結果は、精神身体医学的には、正常範囲内に入る集団と考えられる。

年齢階級別訴え数では、若い男性が、同世代の女性と比較して、訴えが多かった。この点について、一般的には、女性の方が心気的傾向が強いとされるが、酪農村の若い世代では、逆に、女性が男性に比べ、肉体的にも、精神的にもたくましいという結果を得た。女性だけについてみると、40 歳代、50 歳代は、若い世代に比べると、明らかに訴え数が多い。これには、加齢及び女性の性ホルモンと健康との関係が、重要である。すなわち、女性機能の終了する 45~55 歳の更年期の、ホルモンバランスの不安定性が、特に不定愁訴という形で表われたため、このような結果を得たのであろう。いわゆる更年期障害は、自律神経症状、精神症状、および代謝異常に基づく身体症状の三主徴を示し、自律神経失調症状として、顔面紅潮、蟻走感、発汗、心悸亢進、

けいれん、めまいなどがある¹⁰⁾。これらは、C. M. I. の C 項、G 項に含まれる、41~60 歳の C、G の男女別訴え数は、C 項で男子平均 0.9、女子平均 4.1、G 項では、男子 1.7、女子 2.7 をそれぞれ示している。すなわち、この調査結果からも、明らかに更年期女性の自律神経失調に関する愁訴が、同年代の男性に比べ、多いことがわかる。

2. 「農・健」の調査結果

新酪農村の 3 地区を比較してみると、生活のレベルに対する意識が、地区により異なるという点が興味深い。この点について、香川地区の新酪農村住民は、かつてパイロットファームの入殖者で、成功した人々が多いため、ある程度財をなし、生活も安定しているのであろう。そのため、香川地区住民が、他の 2 地区に比較し、生活レベルが高いと考えているものと思われる。

しかし、他の 2 地区の住民との相違など、詳細な社会学的アプローチが必要と考えられる。

農作業時間は、各自により、農作業という概念が必ずしも同じでないこと、仕事の能率、畜舎設備、農業機械、家族構成などの相違により、各農家で異なると考えられる。男性では、30 代後半から 40 代の、農繁期における農作業時間が最も長く、10~16 時間 (Fig. 4) を示した。やはり、男性ではこの年代が酪農村において最も、働き盛りと言えるのではないだろうか。これに対し、女性では、20 代が農繁期に男性並みの農作業時間を示している。しかし、加齢とともに作業時間は短くなっており、このことは、前述の如き、女性特有の愁訴の増加、家事労働の増加が原因と考えられる。また、50 歳以上になると、特に男性では、急激な作業時間の減少がみられ、これは、年齢的体力の衰え、若い世代との交替などによると考えられる。これらの時間については、何年か後の状態を、また調査する必要があると考えられる。

起床・就寝時刻に関しては、農繁期が農閑期に比して、起床時刻が早くなっているが、就寝時刻にはほとんど変化はない。つまり、農繁期は起床時刻が早くなった分だけ、睡眠時間が短くなっており、農作業時間も長い。従って、これが原因となって、疲労から疾病を惹き起こす可能性が推定される。

自覚症状については、C. M. I. とも重複するが、更年期の女性が、肩こり、腰痛などを訴えることが多い。新酪農村の畜舎設備は、各農家で異り、搾乳時腰をかがめる必要のあるものとなないものがあり、腰痛と畜舎設備との関連性など、今後の検討を要する課題と思われる。次に、「息切れ」を訴えたものが、極めて少なかった。これについては、住民の「息切れ」という言葉の認識によっても答え方が異なることが考えられるが、大気汚染がほとんどない地域であることから、これらによる気管支炎や喘息などはないという推定が可能である。今後、食生活の変化、農業の合理化などと相まって、心臓疾患のふえる可能性があるため、充分今後の経過を追うことが必要である。

喫煙や飲酒の生活習慣について考察する。まず、喫煙については、平山¹¹⁾が、各種職業別喫煙率を算出し、農林漁業従事者の男性では 72.9%、女性では 6.6% と報告しているが、今回の調査との比較では、母集団の大きさにかなりの差があるので信頼性は低い。新酪農村の女性喫煙率がやや高いといえる。また、平山¹¹⁾は、全体の喫煙率で、男性 74.3%、女性 10.9% と報告している。これらの調査は、10 年ほど以前のもので、それ以後、生活水準の向上、女性の就業率の上昇とともに、女性の喫煙率はさらに高くなっており、新酪農村での女性の喫煙率は、それに比べ低いとも高いとも、結論づけられないと考えられる。

飲酒については、酪農という、ほとんど休日のない生活習慣から、調査対象者に大酒家といえる人は皆無である。Lelbach¹²⁾は、エタノールにして、160 g (日本酒 6 合に相当) を毎日摂取すれば、20 年間で 61% が肝硬変になるという報告をしており、80~160 g をその危険領域としている。1 日 80 g (日本酒 3 合に相当) を肝硬変の危険ラインとすれば、これを越えて飲酒する人は、この調査ではわずか 1 名に過ぎず、この人もわずかに危険領域に入るというもので、この新酪農村では、アルコール性肝障害が多発することは、まず考えられない。

最後に、医療圏という観点に立つと、別海町は、釧路を中心とした範囲に入ると考えられる。また、対象地区周辺の風土病ともいえるエヒノコックス症の皮内反応テストの実施状況より、住民のエヒノコックスに対する楽観的な姿勢が感じられた。主に飲料水を介しておこるエヒノコックス症を撲滅することが、今後の課題といえるであろう。

V. ま と め

別海町の新酪農村に居住する 20 歳以上の農民を対象として、健康と生活に関するアンケート調査を行った。その結果、C. M. I. による深町分類のパターンは他の調査と比較して、大差なかった。また、更年期女性は明らかに同年代の男性より訴えが多かった。農民健康調査では、新酪農村住民の生活レベルに対する意識、農作業時間、起床・就寝時刻、肩こり・腰痛などの自覚症状、喫煙及び飲酒状況などを明らかに出来た。また農夫症と診断される人はいないと考えられた。プライマリーヘルスケアに関連した一次病院として、大部分の住民が、町立病院を考慮しており、二次以降の病院として、釧路市内の病院を上げる者が多かった。エヒノコックス症のスクリーニングの為に皮内反応テストの受診率は、約 50% であった。

稿を終るにあたって、調査に協力いただいた別海町役場の方々に深く感謝します。

文 献

- 1) 北海道根室支庁：根室地域新酪農村建設事業の概要，1979.
- 2) 別海町総務部総務課統計広報係：2 世紀への旅立ち（昭和 54 年版），1979.
- 3) Brodman, K., Erdman, A. J., Lorge, I. and Wolff, H. G.: The Cornell Medical Index, An Adjunct to Medical Interview. J. A. M. A., 140: 530-534, 1949.
- 4) Brodman, K., Erdman, A. J., Lorge, I. and Wolff, H. G.: The Cornell Medical Index-Health Questionnaire (3): Evaluation of Emotional Disturbances, J. Clin. Psychol., 8, 119-124, 1952.
- 5) 深町 建：Cornell Medical Index の研究（第 2 報），CMI による神経症者の判別基準について，福岡医学雑誌，50: 3001-3009, 1959.
- 6) 青山不二夫：コーネルメデイカルインデックスについての研究補遺，鹿児島大学医学部雑誌，12, 201-229, 1960.
- 7) 安藤延男：CMI を中心とした心理的健康管理とその体制，第 5 回全国大学保健管理研究報告書，150-157, 1967.
- 8) 小此木啓吾・延島信也・重田定義・楠本昌子：心身医学における Cornell Medical Index の研究（その 2）—記入動機，YG との相関，時間的変動性—，精神身体医学，9, 115-122, 1969.
- 9) 金久卓也・深町 建：コーネルメデイカルインデックス—その解説と資料，三京房，14-15, 1972.
- 10) 長谷川義義：内分泌異常の心身医学的研究；第 20 回日本産婦人科学会総会宿題報告要旨—参考編：2, 1968.
- 11) 平山 雄：肺癌と喫煙，肺癌のすべて，南江堂，26-48, 1974.
- 12) Leibel, W. K.: Leberschaden bei chronischen Alkoholismus, Acta Hepatosplenol. 14, 9, 1967.

Summary

The life status and health of the inhabitants in a newly-developed dairy farming village in Eastern Hokkaido were investigated by C. M. I. and our original questionnaires for the life status and health. There was no significant difference between our data and other investigators' on the pattern classified by Fukamachi. The women during climacterium complained significantly more

symptoms than the men of the same generation. From the results of our original questionnaires, we could explain about the life status and health of the people who had been living there. It seemed that no one might be suffered from peasant syndrome.

Diseases of inhabitants were primarily cared in the town hospital. Secondly or thirdly, they were cared in Kushiro. The dermal skin test for Echinococcosis have been practiced to approximately 50% of the families.